

専徳寺報

第456号

令和2年11月6日発行

浄土真宗本願寺派

専徳寺

〒740-0044 岩国市通津2764
☎0827-38-1124 FAX38-1000

①<http://sentokuji-iwakuni.net/>

②Youtube「ひかりといのちきわみなき」

専徳寺

検索



永代経法要

御案内

秋彼岸に続き、規模縮小での法座です。

先行き不安の逆境の時こそ、真にたよりとするべきお経を共に伝えていきましょう。

「コロナ感染対策と法座の両立」、ご理解とご協力よろしくお願いたします。

ご参拝お待ちしております。

日時

11月19日(木)

昼 1時半～2時半

11月20日(金)

朝 10時～11時

ご講師

本願寺布教使

白石 智昭 師 (美祢市)

・両日とも一時間(法話一席)。

・二日目は朝です。

・三密回避にご協力ください。

・飲み物・マスクはご持参ください。

・検温・消毒にご協力ください。

・本堂(50名)の席が一杯になれば、庫裏でスクリーンにてお聴聞していただきます。

・ご自身の体調面など考慮され、参拝の可否をご判断ください。

●参拝セット(念珠・聖典・式章・聴聞カード)

どうぞお持ちください。

専徳寺納骨堂受付中

声に出して読みたい念仏の詩

あじわい

みかん

ムシャ ムシャ

みかんの

あじもうらう

ねんぶつ

ナム ナム

しんじんの

あじもうらう

もらった

あじわい

ナンマンダブツ

ナンマンダブツ

うちあけばなし

ナムアマミダブツは

うちあけばなし

わたしに

によらいさんの

うちあけばなし

どうぞ

たすけさせて

おくれよ

と――

ナムアマミダブツは

うちあけばなし

ひとりのとき

だあれもない

ひとりのとき

おねんぶつさまが

こうささやく

ひとりぢやあ

ないんだよ

ひとりぢやあ――

そのまんま

なんにもわからぬ

そのまんま

たすけたもうと

ナンマンダブツ

ミダの仰せの

そのまんま

ナンマンダブツ

ナンマンダブツ

(木村無相)

『念仏詩抄』

142―143頁



如来・人・言葉

119

藤枝宏寿



ナムアミダブツの仰せに 出遇った木村無相さん

無相^{むそう}さんは、本名は木村勝雄^{かつたけ}と言ひ、明治三十七年（1904）に熊本県八代市に生まれ、昭和59年（1984）に福井県武生市でお亡くなりになっておられます。幼いときに、家庭が非常に不遇であり、両親に対して不満を持っておられました。十七歳のころに、倉田^{くらだ}百三の『出家とその弟子』を通して『歎異抄^{たんいしやう}』にであったのが、どうやらお念仏へのきっかけであったかと思ひます。

二十歳のころに、自分の両親に対する不満が非常に強くて、その不満に対して憤りを持っており、「煩惱を断じてさとりを得たい」という、これも非常に珍しい願ひをおこしたわけです。

それから、あちらこちらと旅をしておりましたが、二十九歳のときに、フィリピンから帰国して、四国遍路を始めました。そして、香園寺^{かうおんじ}というお寺の三密学園^{さんみつがくえん}で真言の勉強を始めます。ところが、三十一歳のころ、真言の修行をしながら、「南無阿弥陀仏^{なんむあみだぶつ}の念仏が出てきてしょうがない」ということで、三十二歳のときに、徳島の浄土真宗の安楽寺で、三年間、浄土真宗の他力を学びました。

ところが、三十五歳になったころに、「どうも自分は真宗の信心は落第^{らくだい}ではないか」と思ひ、安楽寺を出られ、また香園寺^{かうおんじ}に戻ります。そこで、山頭火^{さんとうか}と出会ひ、彼と一週間ほど一緒に生活をするということがありました。翌年の三十六歳のとき、ある所で事務員をしながら、迷いからさとりに至る「生死出離^{しじしゆり}」のことに気づかされました。「生死出離^{しじしゆり}は、南無阿弥陀仏^{なんむあみだぶつ}と、今ここに、すでに成就されているではないか」ということを、ふと思ひ浮かばれたのです。

そして、三十七歳のときに、三重県の松原^{まつはら}到遠^{だうえん}先生のところで、先生と生活を共にしながら、お念仏の教えを聞くことになりました。やがて五十四歳のとき、念仏一つになられます。それまでの間、真言と真宗を三度も行ったり来たりするという、変わった経歴を持った

れたのです。その間に、滋賀県の源通寺の禿義峰師^{とくぎほうし}や、また京都の金子大栄先生などにも、十年、二十年と、長い間、聞法されて真宗の教えを受けられました。真宗の本も五百冊ほど読んでおられたようです。

無相さんは、「とうとう私は、もう念仏一つだ」ということで、そのころいた高野山を最終的に去り、真宗一筋に聴聞するようになりました。五十七歳のときには、東本願寺の同朋会館の門衛をして聴聞されました。

しばらくして、六十九歳のときに『念仏詩抄^{ねんぶつししやう}』（永田文昌堂）を出版されます。同時に、福井県武生市の老人ホーム「太子園」に入寮されました。このことについては後ほど述べます。

七十三歳のときに、NHKラジオ『宗教の時間』で「私の詩と信仰」というテーマで放送しておられます。二年後の七十五歳のときには、太子園の隣にあるお寺で「自分の葬式をしてください」と言つて、生前葬をおこないます。

そして七十九歳のときに、もう一度、NHKラジオ『宗教の時間』に出演しております。「煩惱と私」というテーマです。そしてその翌年、八十歳で武生市の林病院で生涯を終えられます。

先ほど、武生市の太子園に入られたことをお話ししましたが、実はこれには訳があります。花田正夫先生が出しておられた『慈光』という念仏の冊子の中に、無相さんの「そのまま」という詩が掲載されていました。

信者になつたら おしまいだ

信者になれぬ そのままで

ナンマンダブツ ナンマンダブツ

加茂淳光さんという方がこの詩を見て、「これはどういうことだ。親鸞聖人は信心を大事にされているのに、その信者になつたらあかんって、これはどういう訳だ」と疑問をもち、わざわざ京都まで行つて、木村無相さんに聞いたわけです。

そこで無相さんは加茂さんに、次のように答えたということです。まず親鸞聖人の『唯信鈔文意^{ゆいしんしやうもんい}』の、

釈迦如来、よろづの善の中より、名号をえらびとりて、五濁惡時・惡世界・惡衆生・邪見無信のものにあたへたまへるなりとしるべしとなり。

という一文を引用して、「この『無信のもの』という言葉で、私は足

を払われたのです」とおっしゃったのです。これは「私はもともと無信なのだ、信心がない。だからこそ阿弥陀さまのお呼び声があるのだ」という受けとめ方をされていました。

その答えに、加茂淳光さんは、非常に感銘を受けました。そして、二人は話が合いまして、無相さんは身寄りのない独り者でしたから、「福井県に來ないか」ということになり、加茂さんが身元引受人になって、当時の武生市瓜生町にある太子園の寮に、無相さんは入られたわけです。

ただ念仏の人になった無相さん

無相さんは心臓が悪かったそうです。入院されていたとき、私もお見舞いに行きましたけれども、亡くなる日に、加茂淳光さんが無相さんのところへ行きました。そのとき無相さんは次のような言葉を申されたのです。

生き死にの 道はただただ ナムアミダ

ただ称えよの 仰せばかりぞ

心臓が悪くて、つらくてどうにもならない。念仏も出ない。ただ、「ナムアミダブであるぞ」との仰せを聞くばかりで、私はまいらせてもらうという意味でしょう。このような心境に至られたわけです。そこで私は、無相さんの一生をこのような境地にまで導いたものとは何だったのだろうかと思うわけです。

それが『念仏詩抄』という本のなかに表れております。そのはじめの方に、

無相よ 本音をはいて 本音をはいて、 本音をはいて

じぶん自身の 本音を生きろー

と自分で詩い、自分に呼びかけているのです。「本音を生きる」、これがどうやら鍵ではなかったかと思えます。

真宗と真言との往復のとも「本音」です。なかなか自分で納得できない。本当に納得するまで、自分の本音から喜べる、信じられるまで聞いて聞いて、修行し修行しまくったという、それが無相さんでした。ですから、「本音で生きる」ということ、これがキーワー

ドです。本音で生きたから、真宗と真言を三往復もしたのでしようし、そしてその本音を見つめる眼で、自分の姿を見ると、

ほんのうよー わたしがわるいのだ ほんのうは わたしのいう まま ほんのうは わたしのおもうまま ほんのうよー わたしがわるいのだ

という詩になるのです。

二十歳のときに、「煩惱を断つてさとりを得たい」という願いをおこしたから、無相さんにとっては、自分の煩惱がいつも非常に大きなテーマだったのでしょう。自分の煩惱をよく見つめてみると、煩惱を動かしているやつがいる。それが私なのだ、私という我執なのだ。自己中心のころ、これが自分の煩惱を動かしているのだという見方です。これは非常に深い洞察ではないでしょうか。

その自分の本音を見ていくうえで、またこう詠んでいます。

砂をしぼっても 水は出ぬ

わたしをしぼっても 信は出ぬ

真実信心 むこうからー

砂を絞っても水は出ません。信心のない私を絞っても信は出てこない。真実信心は阿弥陀さまのほうから、如来さまからいただくのだと。これが無相さんの基本的心境です。

さらに、その目で自分の実態を見ていきますと、こういう詩になります。

念仏 念仏いけれど 念仏してみりやすぐわかる

念仏なかなかもうせぬと。

信心 信心いけれど 信心してみりやすぐわかる

凡夫の信心つづかぬと

行信ともに落第と しらしてもらえば ようわかる

大悲の願心よりないと

「行」は念仏、「信」は信心。行も信も落第の私なのだ。それを救わんとするのが、如来さまの大悲の願心ではないか。こういう大悲の願心がましましたとはなあ……、というのが無相さんの喜びだったのでしよう。

(以上、『ビハラーと妙好人』(自照社出版)より抜粋)

寺内だより

●み仏にいだかれて〔葬儀勤修〕

9月20日御往生

保津

岡崎 妙子様(95)
喪主 岡崎 福美様

9月24日御往生

中町

大下 絹枝様(91)
喪主 大下 伸様

9月29日御往生

大島

永田 孝志様(59)
喪主 福田 葉月様

10月19日御往生

郷

河本 公子様(97)
喪主 小崎 里紗様

10月23日御往生

光

久本ソメヨ様(103)
喪主 久本 徳夫様

●ご恩を偲びて〔法事勤修 9月9日～11月1日〕

【長野】米本由紀夫50、【通津】神田信子13、
白田直則1、兼国幸満7・100、村上黎子17、
松中伸33・50、橋口征二7、半田幸男1、井
原貞子200、【保津】村河多丸1、赤崎八重子
7、村河武男17、赤崎友彦3・3、【青木】
後藤奈良市7・33、広重範昭33、竹本道成
1、【南岩国】野原明3、【市内】益富弘人
100、大賀美明衛7、蔵田稔幸13・100、村本章

二25、廣重恵子3、【県内】中島辰夫7、岡
嶋淑子3、【岡山】佐藤幸子7、【鎌倉】銀雅
一50、【東京】池本忠正3・33

●おめでとうございます

法物下附式(入仏式)

●10月19日 御三尊(三十代、金欄・藤)

長野 米本 朋行様

お給仕の慶び一人に存じます。

●ご報告します

▼秋讃仏会法要余香 9月30日・10月1日

【講師】中島昭念師

【参詣者】(30日) 昼座52名
(1日) 朝座46名

【お鉢米】木村 勲様



●ご案内します

▼境内清掃作業―専徳寺倶楽部

門徒男性による境内清掃作業を行います。
ご参加お待ちしております(懇親会は休止しま
す)。

【日時】12月19日(土)・13時半～15時半

【申し込み】お寺へご連絡ください。

(電話)38-11124

ご命日：あの人に会いたい

第三回：高倉 健

(俳優、命日：11月10日)



大切な人を思い出す
ご命日。朝のお仏壇へ
のお礼が、少し味わい
深いものになります。

205本の映画に出

演した銀幕の大スター高倉健さん。「網走番
外地」などの任侠映画に始まり、「八甲田山」
「幸福の黄色いハンカチ」「鉄道員(ぽっぽ
や)」「ホテル」等々、存在感ある演技を見
せてくれました。今年七回忌です。

「往く道は精進にして、

忍びて終わり悔いなし」

死の直前に書いた手記の締めくくりの言
葉で、健さんの座右の銘といわれています。
そしてこれは、普段おつとめする「讃仏偈」
(赤本64頁)の最後に出ている言葉です。

仮令身止 諸功徳中

我行精進 忍終不悔

(たとひ身をもろもろの功徳のうちに止くと
も、わが行、精進にして、忍びてついに悔
いじ)

阿弥陀仏が法蔵菩薩の時に誓われたお言
葉で、「たとえどんな苦難にこの身を沈めて
も、衆生を救うまでさとりを求める修行に
励み、耐え忍び、最後まで決して悔いるこ
とはない」という意味です。